

供 述 調 書

本 籍 群馬県高崎市本町1丁目5番2号

住 所 群馬県前橋市元総社町1345番地

職 業 アルバイト

氏 名 佐 藤 純

昭和61年3月10日生（24歳）

上記の者に対する 現住建造物等放火 被疑事件につき、平成22年1月16日、前橋地方検察庁において、本職は、あらかじめ被疑者に対し、自己の意思に反して供述をする必要がない旨を告げて取り調べたところ、任意次のとおり供述した。

1. 私は、平成22年1月10日午後11時ころ、私のアルバイト先の同僚である

井波真宵

が住んでいる、前橋市南町三丁目にある「アパートワグナリア」104号室のドアにライターで火をつけてしまいました。これから、今回の事件の経緯について、思い出して本当のことをお話しします。

2. 私は、22歳のときに大学を卒業しましたが、その後、定職に就かず、前橋市六供町のガソリンスタンド

ヤングガン

でアルバイトをして生活していました。当初は、アルバイト同士仲も良く、楽しく仕事をすることができました。

しかし、1年くらい前に、井波さんがアルバイトとして働くようになってから、職場の雰囲気次第に悪くなってしまいました。井波さんは

大の男嫌い

で、金髪でたばこを吸う私のことを、働き始めた当初から嫌っていたのです。それでも、しばらくは我慢していたようですが、

平成21年の5月ころ

から、私の悪口を言い始め、私としばしば喧嘩になるようになりました。

もともと、喧嘩と言っても井波さんが一方的に

私の悪口を言ったり、私の顔を平手で殴ったり

するだけで、私が井波さんに何かすることはありませんでした。

3. それでは、今回の事件当日のことについてお話しします。

その日、私は遅番だったので、店に

午後1時前ころ

に出社しました。すると、店の社員用出入り口のあたりで、仕事を終え家に帰ろうとしていた井波さんと出会ってしまったのです。

井波さんは、私を見て、顔を背けて通り過ぎようとしていました。

あまりによそよそしい態度だったので、私は頭にきて、

そんな態度では、高梨に振られるぞ

と言ってやりました。ちなみに、高梨とは、井波さんの恋人のことです。

井波さんは、それを聞いて怒ったのか、いきなり

私の左の頬を、右手で思いきり殴ってきた

のです。

私は、みんなの前で殴ることはないだろうと強い憤りを覚えました。

そして、

井波さんに復讐してやろう

店のガソリンを少しもらって、火をつけてやろう

と考えるようになったのです。

4. その日は、午後6時ころに仕事が終わりましたが、まだ人通りがある時間帯であるため、私は仕事に隙を見て盗んでおいたガソリンを入れたペットボトルを持って、とりあえず恋人の種島八千代の家に行くことにしました。

種島の家には、午後7時ころに着き、そこでご飯を食べ、一緒にテレビを見ました。そうしているうちに、

午後10時半過ぎころ

になったので、そろそろ井波さんの家に火をつけても、見つからないころだろうと考え、種島に、

ちょっとコンビニに行ってくる

立ち読みしてくるから、少し遅くなるかも知れない

と断って、種島の家を出ました。

5. 種島の家から井波さんの家までは、車で20分くらいの距離で、私は

午後10時50分ころ

には、井波さんの家の近くに到着していました。私は、車を道路に止め、

普段仕事で使用している白い軍手

をはめ、ガソリン入りのペットボトルを左手に持って、井波さんの家に向かいました。軍手をしたのは、寒かったことと、当然のことですが、

指紋を残さないようにするため

です。人通りはまったくなく、街灯の明かりも暗くて、

火をつけるには絶好の条件だな

と考えたことを覚えています。

問 あなたは、火をつける前に、電柱の陰でたばこを吸っていないか。

答 たばこを吸ったことはありません。緊張でそれどころではありません。

6. 表札が掛っていたので、井波さんの部屋はすぐに分かりました。私は、

ペットボトルのふたを外し、部屋のドアにガソリンをかけました。

しかし、このままでは、火をつけたら

すぐに燃え上がってしまい、火をつけたことがバレてしまうことに気づき、私はたまたま持っていたタオルを導火線代わりに使うことにしました。このタオルは、ジャニーズタレントの

采女英幸の顔写真入りタオル

で、采女英幸の大ファンである種島が私に貸してくれていたものです。

私は、ペットボトルに残っていたガソリンをタオルに染み込ませ、燃えやすくしてから、タオルをねじって線のようにして、一方の端をガソリンの掛っている井波さんの部屋のドアに付け、もう一方の端に

ライターで火をつけた

のです。

火はメラメラと燃え上がり、次第に井波さんの家のドアに向かっていったので、私は

早く逃げないと見つかってしまう

と思い、走って私の車まで行き、すぐにエンジンを掛けてその場から離れたのです。途中、消防車のサイレンが聞こえてきたので、

やった、上手くいった

これで井波さんに思い知らせてやることができた

と思い、胸がすかっとなりました。

問 あなたは、ライターでなくマッチで火をつけたのではないか。

答 私はマッチを持っていませんでした。ライターで火をつけました。

問 火事の現場には、マッチの燃え差しが落ちていたが、違うのか。

答 そこまで言われれば、もしかしたら、マッチで火を付けたのかも知れません。

7. 私は、種島の家に戻る前に、コンビニに寄って、「週刊采女英幸」を買いました。これは、雑誌に特典が付いており、全号揃えると、采女英幸等身大プラモデルが完成するというもので、種島が集めているものです。

これは、私がきちんとコンビニに行ったということを種島に示して、怪しまれないようにするためでした。

ガソリンを入れていたペットボトルと、白い軍手は、コンビニの外にあるごみ箱に捨てました。

種島の家に戻ったのは、およそ

午後11時半ころ

でした。そして、種島に雑誌をお土産に渡して、私はすぐ自分の家に帰ったのでした。

8. 今回は、このような大それたことをしてしまい、とても反省しています。井波さんにも悪いことをしてしまいました。できるなら、謝罪して許して欲しいと思っています。

佐 藤 純 指印

供述人の目の前で、上記のとおり口述して録取し、読み聞かせ、かつ、閲読させたところ、誤りのないことを申し立て、末尾に署名・指印した上、各頁欄外に指印した。

前 同 日

前橋地方検察庁

検察官 検事 青 木 二 郎 印
検察事務官 綾 辻 司 印